



**札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor***

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	幼児の心臓カテーテル検査におけるプレパレーションに関する看護師の認識の変化過程
Author(s)	浅利, 剛史
Citation	札幌保健科学雑誌, 第 2 号:19-25
Issue Date	2013 年 3 月
DOI	10.15114/sjhs.2.19
Doc URL	<a href="http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/5555">http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/5555</a>
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n2186621X219.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

原 著

## 幼児の心臓カテーテル検査におけるプレパレーションに関する 看護師の認識の変化過程

浅利剛史

札幌医科大学保健医療学部看護学科

目的：看護師が心臓カテーテル検査を受ける幼児への看護ケアを検討する中で、プレパレーションの認識がどのように変化するかを明らかにすること。

方法：参加観察とインタビューを行い質的記述的に分析した。

結果：プレパレーションの効果を肯定的に捉えていた看護師は【幼児が主体的に医療行為を受容できるようにしたい】認識が、フォトブックを用いたプレパレーション後に【プレパレーション実施への不安全感】と【幼児に必要なプレパレーション】との間でゆらいだ。そして心臓カテーテル検査日にプレパレーションを実施した幼児を受け持ち、【フォトブックと目の前の情景が結びついた幼児の行動】や【医療行為を受けようとする幼児の行動】に気づき、【幼児が主体的に医療行為を受容できるようにしたい】認識を強めた。

考察：プレパレーションに関する情報共有の場を設定すること、継続教育の初期にプレパレーション教育を行うことの有効性が示唆された。

キーワード：小児看護、幼児、心臓カテーテル検査、プレパレーション、認識

### Changing Process of Nurse's Perception of Preparation to Young Children Hospitalized for a Cardiac Catheter Test

Tsuyoshi ASARI

Department of Nursing School of Health Sciences Sapporo Medical University

Purpose: This study was carried out to find out how the nurses' thoughts about preparation would change when they were responsible for nursing care of young children undergoing a cardiac catheter test.

Method: Participant observation and interview approach was taken for this qualitative and descriptive analysis.

Results: Those nurses having positive views about preparation themselves conducted preparation with a hope to "prepare children so that they would feel happy to have treatments/procedures". After preparation sessions using an album showing what would happen when the child was admitted to hospital for cardiac catheterization, the nurses' feelings swayed between "I could not prepare the child adequately" and "preparation was essential for any child who would undergo a cardiac catheter test". On the day of the test they cared for the same child and realized from the child's behavior that "the child was able to associate what (s)he was experiencing in the hospital with what was shown in the album" and "(s)he was willing to undergo intervention". This strengthened their determined with to "prepare children so that they would feel happy to have treatments/procedures".

Discussion: The study suggested the effectiveness of sharing information on preparation, as well as the importance of giving nurses opportunities to learn about preparation in the early stage of their continuing professional development program.

Key words : pediatric nursing, young child, cardiac catheter test, preparation, perception

Sapporo J. Health Sci. 2:19-25(2013)

## Ⅰ はじめに

近年、看護師が子どもに処置・検査等の説明をすることで子どもが「心理的準備」することを支援するという“プレパレーション”の考えが広まりつつある。しかし、看護師はプレパレーションを認識しているが実践に結びついていないという現状がある。杉本ら<sup>1)</sup>の看護師を対象とした全国調査によると、3～5歳児に対して点滴する前に子どもに説明を行うことは「とても必要」と認識している看護師は45.1%であったが、点滴する前の子どもへ説明の実施率は25.3%と低かった。同様に6～8歳児に対して「とても必要」と認識している割合は79.4%、実施率は45.7%であり、認識と実践の間に齟齬があることを示した。同様に勝部ら<sup>2)</sup>が中国・四国・九州・沖縄地方の小児看護師を対象に行ったアンケートによるとプレパレーションを行うことを「いつも必要」と認識している看護師が「実施可能な子にはすべて行っている」と回答した割合は半数に満たなかった。齋藤ら<sup>3)</sup>はプレパレーションの認識と実践の齟齬についてアンケート調査を行い、プレパレーションを実践できない理由として「どのように行っているのかわからない」「時間や人員が足りない」等を挙げている。そして、山口ら<sup>4)</sup>はアンケート調査から幼児への処置に関するプレパレーションの促進要因と阻害要因について明らかにした。すなわち、促進要因は「患児の基本的人権の尊重」であり、阻害要因は「ネガティブな職場環境」「実施に対する自信のなさ」である。

Umanら<sup>5)</sup>はプレパレーションにより採血時の痛みが軽減されることを報告している。小児医療に携わる看護師としてプレパレーションの実践を通して、子どもに最善の医療を提供しようとする認識をもつことは重要だと考えた。そこで、看護師が心臓カテーテル検査を受ける幼児への看護ケアを検討する中で、プレパレーションを志向する認識がどのように変化するかを明らかにすることを目的に本研究を行った。心臓カテーテル検査を選定した理由は短期間の入院中に多くの処置や検査があること、半田ら<sup>6)</sup>が幼児の心臓カテーテル検査のプレパレーションが検査後の安静保持に効果があったと報告しており、継続的に医療が必要な先天性心疾患児への効果的な看護の示唆が得られると考えたためである。また、本研究は看護師がプレパレーションに取り組むための教授方法を考慮する上での基礎資料となることに貢献する。

## Ⅱ 研究方法

### 1. 研究デザイン

対象者である看護師と筆者とが看護ケア場面について振り返るという過程を通じて、看護師の認識の変化を記述する記述的研究デザインである。

### 2. 用語の操作的定義

**プレパレーション**：幼児が心臓カテーテル検査による入院中に受けるすべての検査や処置、日々の診療やバイタルサインの測定などに対し、どうしてほしいと思っているのか、希望に沿うためにはどうしたらよいかを看護師が関わりのなかでアセスメントし、幼児の対処能力を發揮できるような環境を作り出すために理解できる言葉や方法を使って幼児に説明すること。

### 3. 研究対象

便宜的標本抽出法により抽出したX総合病院の小児科病棟（以下、Y病棟）に勤務し、心臓カテーテル検査目的で入院している幼児を受け持った日勤の看護師とした。幼児の条件として心臓カテーテル検査目的で入院した2～6歳児であり、性別、疾患名、心臓カテーテル検査の経験や精神発達遅滞の有無は問わないとした。

Y病棟においてプレパレーションは積極的に取り組まれていなかった。そのため調査期間前に幼児に心臓カテーテル検査のプレパレーションを行うためのツールとしてフォトブックをY病棟の看護師らとともに作成した。人形等のツールだと持ち運びに不便であり、イラストだと実物を見た時に子どもが気づかない場合もあるかもしれないなどの理由からフォトブックに決定した。フォトブックの内容は入院から退院までに心臓カテーテル検査を受ける幼児が経験する検査・処置場面の写真を載せ、吹き出しでその写真についての解説を加えたものである（写真1）。具体的に載せた写真は、入院時のレントゲン撮影、エコー、処置室、点滴刺入部のシーネ固定、足背マーキング、検査前の鎮静（座剤）、ストレッチャー、血管造影室の扉、血管造影室の看護師・医師の服装、血管造影室内、心臓カテーテル検査時・後の抑制、心臓カテーテル検査後の内服薬で構成された。

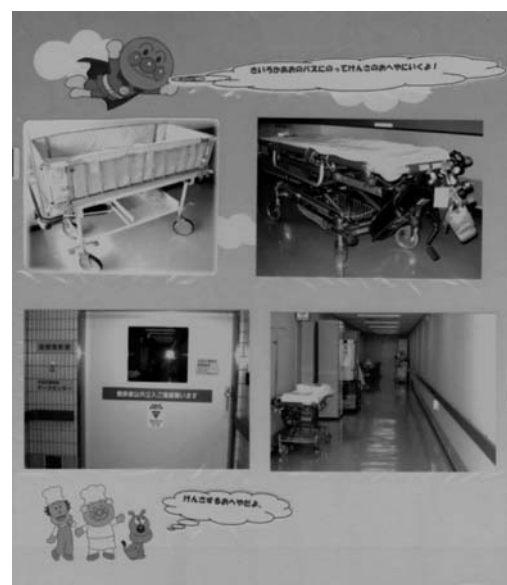


写真1 フォトブックの内容

#### 4. データ収集方法

データ収集期間は200X年6月から10月であった。筆者が収集したデータは次の2つであった。

- 1) 看護ケア場面の参加観察により得られたフィールドノート
- 2) 対象となる看護師へのインタビュー

フィールドノートに記録した看護ケア場面は入院直後の採血、フォトブックを用いたプレパレーション、心臓カテーテル検査のための静脈路確保、血管造影室への移送等、心臓カテーテル検査を受ける幼児が入院してから退院するまでに受ける検査や処置で筆者が同席可能な場面であった。フォトブックを用いたプレパレーションをするにあたり幼児の保護者と筆者で話し合い、いつプレパレーションを行うか、どのように説明するか（見せないほうがよい写真やいつも保護者が使用している表現などの聴取）を決めた。その結果を看護師に伝え、看護師に幼児とその保護者にフォトブックを用いたプレパレーションを行ってもらった。

インタビューは看護ケア場面の参加観察後に行った。看護師が行った看護ケア場面で幼児の反応をどのように捉えており、その反応にどのように対応していたのか、どうすればより良い看護ケアになるかという自己内省を促せるようにインタビューした。参加観察とインタビューはメモを取ることと同時にICレコーダーで記録した。

#### 5. 分析方法

インタビュー、フィールドノートのデータより看護師のプレパレーションに関する認識にかかわる語り、看護師の言動や看護ケアに対する幼児の反応を抽出し、質的帰納的分析を行った。分析の信頼性と妥当性を担保するために研究過程において質的研究に熟練した指導教員にスーパーバイズを受け、適宜再検討や修正を行った。

#### 6. 倫理的配慮

看護師と幼児の保護者には口頭と文書で説明し承諾書への署名をもって同意を得た。具体的な説明内容は研究目的、研究方法、研究期間、研究により得られたデータは研究目的以外に使用しないこと、同意の撤回はいつでも可能であること、匿名性と守秘義務を厳守すること、研究によって収集されたデータは鍵のかかる場所で安全に管理すること、研究の進捗状況について適切な回答と報告をすることを保証した。また、幼児には検査や処置ごとに参加観察してよいかを確認して肯定の返事を得た時のみデータ収集を行った。なお、本研究は研究開始前に所属機関の倫理審査をかねた研究計画書審査会で承認を得た。また、X総合病院の倫理審査を受け、施設代表者より承諾を得た。

### III 結 果

#### 1. 対象者の基本属性（表1）

対象の看護師は7名、看護師経験年数は0～23年、Y病棟経験年数は0～5年であった。対象者が受け持った幼児は男児5名、女児2名、年齢は2歳7ヶ月～6歳6ヶ月であった。また、Y病棟において未就学児は原則として入院中は保護者が付き添う決まりとなっていた。幼児の付き添い者はすべて母親であった。

調査期間で得られたデータからプレパレーションに関する認識が変化しと考えられた看護師と変化しなかった看護師がいた。これらの看護師の違いはフォトブックによるプレパレーションを行う前の認識が異なっていたということだった。具体的にはプレパレーションの効果を肯定的に捉えているかそうでないかの違いであった。プレパレーションの効果を肯定的に捉えていた看護師は2名（以下、A群）、プレパレーションの効果を肯定的に捉えていない看護師は5名（以下、B群）であった。A群は時間の経過とともにプレパレーションを志向する認識を高めたが、B群は時間が経過してもプレパレーションを志向する認識に変化は見られなかった。

以下に、認識の経時的変化の様相を示す。結果について看護師の語りおよびフィールドノートの記述は「」、サブカテゴリーは「」、カテゴリーは「」で示した。

表1 対象者の概要

看護師	A群		B群				
	1	2	3	4	5	6	7
看護師経験年数(年)*	0	0	I	I	II	III	III
幼児の年齢	6y6m	3y7m	2y9m	3y9m	5y9m	4y3m	2y7m
幼児の性別	男	男	女	男	男	女	男

\* I : 1～5年 II : 6～10年 III : 11年以上

#### 2. A群の特徴（図1）

図1は看護師のプレパレーションに関する認識の経時変化である。横軸は時間の経過、縦軸はプレパレーションの志向性を模式的に示した。

#### 1) フォトブックによるプレパレーション実施前

A群2名はY病棟に就職して間もない新人でありであった。働いてみるとプレパレーションを実施するには「時間的な余裕がないと、精神的に余裕がなくなる。ゆっくり話したいけど、その余裕がなくなっちゃう」と「時間確保の困難さ」があると気づき、「自分の意思っていうよりは先生がどういう感じで採血するかによって、それに従っているっていう感じ」と「医師の指示には従う」ことも重視し、これらは抑止因子として作用していた。

その一方で処置時の母子分離について「無理やり（母親と）引き離してまで、採血するのはかわいそう」「なんでここの病棟は処置室にお母さんを入れないんだろう？」と「母親が幼児の近くにいる」ことが重要と考え、処置室に

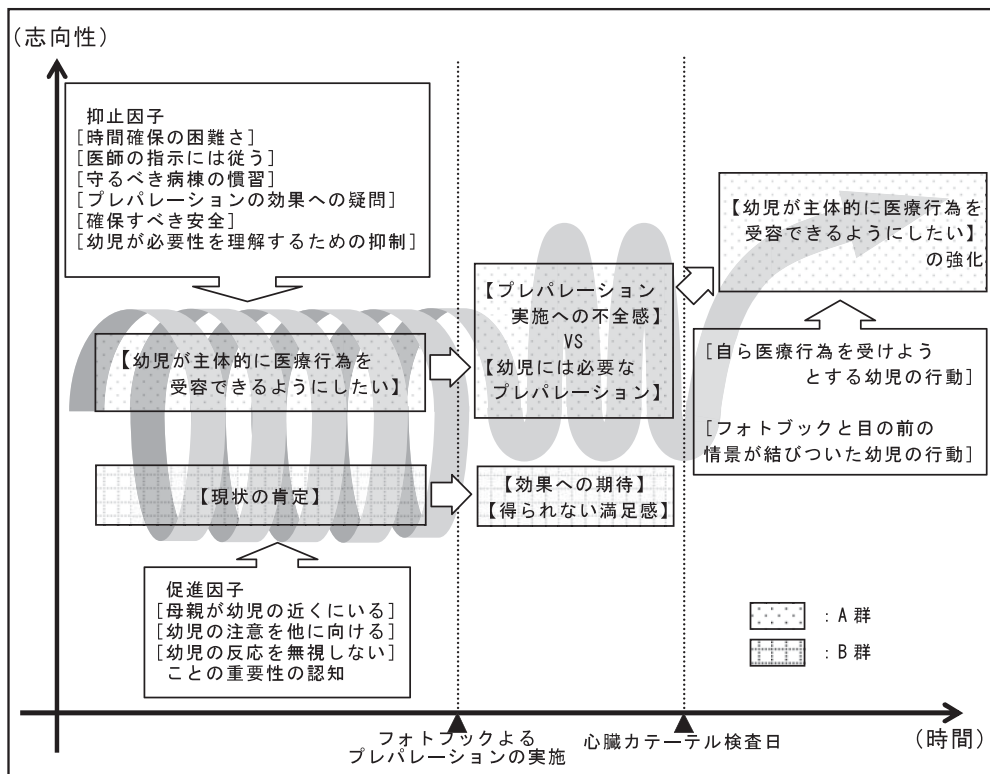


図1 看護師のプレパレーションに関する認識の経時変化

母親が入れないY病棟で母親が処置室に入ることを希望した時に拒否せず、入室させていたり、処置室以外でおこなう処置等は積極的に母親にそばに近くにいるもらったり、保護者の膝の上に子どもに座ってもらったうえで保護者と一緒にケアする様子があった。また、検査室への移動時に子どもが持参したおもちゃで真剣に遊んでおり、スムーズに検査室に入室したことをふまえて「今日は好きなおもちゃいじっていたから結構気はまぎれて、いい状態だったっていうのはすごい感じていて」と話していた。また、処置時に好きなおもちゃの話題を子どもに話しかけることで処置されている部位から好きなおもちゃに気が向かせるように配慮し、「(前日も受け持っていたことをふまえて) どういうものに興味があるのかっていうのを把握していたので、実際に話してみたら落ち着いてくれたからよかった」と処置や検査時に「幼児の注意を他に向ける」ことが幼児にとって有益であることを語っていた。さらに、血圧測定を嫌がり、マンシェットの加圧を「痛い」と訴える子どもに測定に影響しない程度にさすったり「大丈夫だよ」と伝えながら血圧測定を行っていた。看護師は「無理やりやらないで痛いことをしないっていうことをちゃんとわかってもらうことが必要」「子どもに真正面から向き合えば、子どもだってちゃんと応じてくれる」と「幼児の反応を無視しない」ことが重要であると考えており、これらは促進因子として作用していた。これらの促進因子が作用し「子どもにはやっぱり嫌な思いをしてほしくないし『がんばろう』って前向きに思わなくてもいいから、せめて『仕方ないけどやろう』

と思って処置室とかに行けるようになったらいい」と【幼児が主体的に医療行為を受容できるようにしたい】と考えていた。

## 2) フォトブックによるプレパレーション実施後

Y病棟の看護師らと作成したフォトブックによるプレパレーションを実施した後では、A群は幼児が「プレパレーション中にフォトブックのページをすぐにめくろうとした」ことや「看護師の問いに幼児がカラ返事のような返事をしていた」ととらえていた。このことで「(幼児に) 全然聞いてもらえなかった」と「感じなかった手ごたえ」をインタビューのなかで語った。また、「心臓カテーテル検査の経験がある幼児に説明していると泣きだした」ことから「がんばることを思い出さずすぎたっていうか、なんかそういう風になっちゃって戸惑って…」と「幼児へさせてしまった嫌な思い」からA群は【プレパレーション実施への不全感】をもった。プレパレーションを実施することで【幼児が主体的に医療行為を受容できるようにしたい】という前提が否定されたように感じ、ゆらぎを生じさせた。それでも【幼児には必要なプレパレーション】であると考えていた具体的な言葉として「少しでも納得するためには必要なんじゃないかなと思ってやっています」と「幼児が納得するためのプレパレーション」であること、「説明を受けたっていうことは記憶に絶対残ってるから思い出さっかけになるし意味がある」と「プレパレーションされた記憶が残る」こと、「覚えてなくても情報提供すること自体

に意味がある」と「幼児には情報を得る権利がある」ことを自身に言い聞かせていた。不全感を抱き、ゆらぎながらも【幼児には必要なプレパレーション】という認識を継続させていた。

### 3) 心臓カテーテル検査日

A群は心臓カテーテル検査日にプレパレーションを実践した幼児を受け持ち、その幼児の検査・処置時の反応によりプレパレーションの効果を確信した。幼児が「心臓カテーテル検査室の前の扉の前で指をさし『あっ』と声を出す」「足背マーキング時に自ら足を差し出す」といった「フォトブックと目の前の情景が結びついた幼児の行動」に気づいたり、「点滴刺入時に処置があることを伝えると自ら処置室に向かう」などの行動から「自ら医療行為を受けようとする幼児の行動」をしていることにA群の看護師は気づいた。これらのかかわりでA群は「(プレパレーションをしたことで)検査に対して歩み寄れるようになる」「(事前に情報提供したことで)どうしたらよいか(幼児に)聞けたからよかったし、本人が頑張ってくれたからよかった」とプレパレーションは幼児にとって必要な支援であると考えた。幼児の「自ら医療行為を受けようとする幼児の行動」と「フォトブックと目の前の情景が結びついた幼児の行動」に気づくことで看護師のプレパレーションの志向性を高めるように作用した。その結果としてA群は【幼児が主体的に医療行為を受容できるようにしたい】という認識を強めた。

## 3. B群の特徴(図1)

### 1) フォトブックによるプレパレーション実施前

B群はフォトブックによるプレパレーションを実施する以前に、病棟の事情を語り【現状の肯定】をすることでプレパレーションを実践することそのものに消極的であった。A群と同様に促進因子と抑制因子のどちらも観察されたが、B群は促進因子より抑制因子の方が強く作用していた。B群は「親がいて手を握ってくれているだけでも、安心感はあるとは思うんですけどね」「子どもが辛いときに親と一緒にいてあげられないのはつらいから」と幼児と親の視点から「母親が幼児の近くにいる」ことが重要であると語っているが、「時間でいかなきゃなんないものに関しては(抑制することは)しょうがない」と「時間確保が困難」であると感じていた。また、「(処置室の前)で待ってもらうのが先生の基本姿勢なんですよ」と「医師の指示には従う」ことで自らの考えを表現できないこと、「病棟的に処置室には親入れないっていうベースみたいのがある」と「守るべき病棟の慣習」があると考えていた。そして、「プレパレーションをしたからよかったのか、しなくてもよかったのかの判断ができない。何もしなくても意外によかったのかもしれないって思っちゃったりするからね」と「プレパレーションの効果への疑問」があった。さらに、

「これはやばいみたいな子は押さえつけて、安全を守るためにしなきゃいけない」と「確保すべき安全」があることや「(処置を受ける)必要性があるんだっていう風なことを理解するには押さえることが結局最終的にはうまくいく方法であったりとか…」と「幼児が必要性を理解するための押さえ」であると、現状の抑制は幼児のために行っていると語っていた。このようにB群には促進因子も観察されるが、抑止因子が促進因子を上回っており、抑止因子がリングワンダリング(ランドマークがない状態で平面を歩いている時、大きな円を描くように歩き元の位置に戻るといった意味の登山用語)している状態であった。これらの抑止因子によりB群は変化しようとはせず【現状の肯定】をしていた。

### 2) フォトブックによるプレパレーション実施後

B群はフォトブックによるプレパレーション実施後に幼児の反応から【効果への期待】があった。「検査に行く時に分かって行けたんだったら、すごい意味あるなとは思ってたんですよ」「検査後の抑制を(プレパレーションしたことで)我慢してきたらすごいんだけどね」とプレパレーションを実施したことによる「幼児の主体的な姿への期待」をし、「ダメかもしれないと思うような子でも、とりあえずやってみるっていうのは大事だと思った」と「とりあえずやってみる」ことも必要であると語っていた。また、「フォトブックを使うと実際のイメージ化はしやすいのになって。説明する側としては説明しやすい」と看護師の業務という視点から「情報提供のしやすさ」を感じていた。

その一方でB群はフォトブックを用いたプレパレーションに対して【得られない満足感】があった。具体的には「今まで子どもに直接説明することがあまりなかったから、どうやって切り出して、これを説明しようかっていうのがよくわからなくて困って」と「情報提供のバラエティの少なさ」があった。Y病棟には決まりで実際に検査後の安静を保つために用いる抑制帯を使用してデモンストレーションを行うことになっている。しかし、フォトブックを用いたプレパレーション後に抑制のデモンストレーションをしようとする「幼児が激しく啼泣して抑制デモンストレーションをするのを拒否した」ことからB群の看護師は「実際やるとなったら意外とどの状況においてもだめっていうかもしれないしね、正直言ってわかんない」とプレパレーション前の抑止因子となっていた【効果を実感できない】ことをプレパレーション実施後に改めて感じていた。また、幼児が「プレパレーション実施中に興味のなさそうな反応をした」ことから「子どもが飽きちゃったのかなあって。一枚のページでみた方が飽きないのかな」と「フォトブック改善の提案」が語られた。

B群は【効果への期待】より【得られない満足感】の方が強く、帰結していた。したがって、A群にみられたゆらぎはB群には認められなかった。B群は心臓カテーテル検

査日にフォトブックによるプレパレーションを実施した幼児を受け持つ機会がなかった。Y病棟では心臓カテーテル検査日の子どもの受け持ちを新人看護師が受け持つことが多い。調査期間中にB群の看護師がプレパレーションを行った子どもを検査日にも受け持つ機会がなかった。このような過程を経てB群はプレパレーションを志向する認識に変化が認められなかった。

## IV 考 察

A群とB群の違いは1. A群は心臓カテーテル検査日にフォトブックを用いたプレパレーションを行った幼児を受け持ち、B群は受け持たなかった点、2. A群は2名とも新人看護師であったのに対し、B群は通算看護師年数1年以上であった、という2点である。この2点から考察する。

### 1. A群は心臓カテーテル検査日にフォトブックを用いたプレパレーションを行った幼児を受け持ち、B群は受け持たなかったこと

A群は心臓カテーテル検査日に幼児の反応がいつもと違うことに気づいたことでプレパレーションへの志向性を強化した。笹木<sup>7)</sup>は小児の痛みアセスメントツールを導入し、看護師がツールを活用することを通じて子どもの痛みに関して様々な気づきを得たことで疼痛緩和に対する意識やケアの変化につながっていることを報告している。本研究もフォトブックというプレパレーションツールを用い、心臓カテーテル検査日にプレパレーションを行った幼児の反応がいつもとちがうことにA群が気づいた。このことでA群はプレパレーションを志向する認識を高めた。この結果をふまえるとプレパレーションへの志向性を高めるためには同じ看護師が幼児にプレパレーションを行ない、処置や検査のときも受け持つことが理想的だが勤務管理上、現実的ではないと考えられる。

社会学習理論<sup>8)</sup>によると行動変容のためには自己効力感を高める必要がある。自己効力感は結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信であり、自己効力を高めるためには4つの種類があるといわれている。具体的には1) 自分で実際に行ってみること(遂行行動の達成)、2) 他者の行為を観察すること(代理的経験)、3) 自己教示や他者からの説得的な暗示(言語的説得)、4) 生理的な反応の変化を体験してみること(情動的喚起)である。プレパレーションを行った子どもを検査日も受け持つ機会(遂行行動の達成)がない場合は、「代理的経験」により自己効力感を高めることでプレパレーションの志向性を高めることができると考える。そのため、例えばプレパレーションの事例カンファレンスを開催することなど情報共有の場が必要かと推察される。また、プレパレーションは子どもへ情報を提供するという側面から子どもの権利を保障するという意味もある。

そのため、プレパレーションを実践するためには看護師の倫理的感受性を高める必要がある。倫理綱領の勉強会や輪読会を開催することで倫理的感受性を高めることがプレパレーションに関する認識を変化させ、実際に子どもにプレパレーションを実践するための素地になると考える。

### 2. A群は2名とも新人看護師であったのに対し、B群は通算看護師年数1年以上であったこと

本研究では新人看護師が認識や実践を変化させた。A群は付き添い者が処置室に入れない現状に疑問を持っていた。一方で、特に10年以上のB群には問題状況に気づきづらく、病棟の慣習に従う傾向が観察された。Funkら<sup>9)</sup>はエビデンスに基づく実践(evidence-based practice)の個人的バリアとして看護師の研究に対する「価値観」「スキル」「気づき」をあげている。同じ病棟に複数年在籍し、既存の規則や規範に慣れ親しむことでevidence-based practiceの研究に対して価値を見出せない、自身の経験則を優先させるため研究の質を評価できない、日々の業務の繁忙な状況から臨床に必要な研究自体に気づかないというバリアがB群の看護師にあったと推察される。プレパレーションを実践するためには個人レベル、組織レベルで介入する必要がある。組織レベルで認識を変化させるためには基礎研究成果の臨床応用化を進める、いわゆるトランスレーショナル・リサーチを病棟単位で臨床看護師と協働で行っていくことで認識が変化できると考えられる。また、個人に介入する場合はevidence-based practiceに対するバリアが強固になる前、つまり卒後教育の初期にプレパレーション教育を行うことがより有効であると示唆された。

## V 研究の限界と今後の課題

本研究はY病棟の看護師を対象にするという一施設に限定して行ったものであり、組織の風土、慣習や文化によるバイアスが考えられる。そのため、今後は複数の施設でのデータ収集が必要である。また、B群は心臓カテーテル検査日にプレパレーションを行った幼児を受け持つおらず、幼児の反応を確認する機会がなかった。その機会があったうえで認識が変化するのかどうかといった追跡調査も今後必要である。

## VI 結 論

心臓カテーテル検査を受ける幼児に看護師が効果的な看護ケアを検討する取り組みの中でどのように看護師のプレパレーションの認識が変化するのか、その過程を明らかにすることを目的に本研究を行い、以下のことが明らかになった。

- 1) プレパレーションの効果を肯定的に捉えていた看護師は【幼児が主体的に医療行為を受容できるようにした

- い】という認識があるが、フォトブックによるプレパレーション実施後に【プレパレーション実施への不全感】と【幼児に必要なプレパレーション】との間でゆらいだ。しかし、心臓カテーテル検査日にフォトブックによるプレパレーションを実施した幼児を受け持つことで【フォトブックと目の前の情景が結びついた幼児の行動】や【自ら医療行為を受けようとする幼児の行動】に気づき、【幼児が主体的に医療行為を受容できるようにしたい】を高めるという変化過程であった。
- 2) プレパレーションの効果を肯定的に捉えていない看護師は抑止因子が促進因子より強く働いているため【現状の肯定】をしており、プレパレーション実施後に【効果への期待】をしながらも【得られない満足感】があり、両者の間でゆらぐことはなかった。
- 3) 看護実践への示唆としてA群とB群の過程を鑑み、プレパレーションに関する情報共有や倫理的感受性を高めるためカンファレンスを設定すること、卒後教育の初期にプレパレーション教育を行うことが有効であることが示された。

## 謝 辞

本研究に快くご協力、ご指導をいただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。本研究は2009年度札幌医科大学大学院修士論文の一部に加筆・修正を加えたものであり、結果の一部を第30回日本看護科学学会において発表した。

## 文 献

- 1) 杉本陽子、橋本ゆかり：子どもが採血・点滴を受けるときのプレパレーションに関する研究—看護師・医師・家族の考え方と実際について—。蝦名美智子（研究代表者）（編）. 医療処置・手術を受ける子どもへのプレパレーション・モデルの開発と教材開発. 平成17～20年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））：1-30, 2009
- 2) 勝部奈々子、松森直美：入院している小児に対するプレパレーションの普及に関する検討—中国・四国・九州・沖縄地方の小児看護師を対象としたアンケート調査から—。小児看護29(5)：647-654, 2006
- 3) 齋藤美紀子、高梨一彦、小倉能理子他：プレパレーションに対する看護者の認識とその実施状況。弘前学院大学看護紀要5：47-56, 2010
- 4) 山口孝子、堀田法子、下方浩史：幼児への処置に関するプレパレーションの促進要因と阻害要因の検討—意識と実態とのずれに着目して—。日本小児看護学会誌18(3)：1-8, 2009
- 5) Uman, L. S., Chambers, C. T., McGrath, P. J., et al.: A systematic review of Randomized Controlled Trials Examining psychological interventions for needle-related procedural pain and distress in children and adolescents : an abbreviated Cochrane review. Journal of Pediatric Psychology33(8)：842-854, 2008
- 6) 半田浩美、二宮啓子、西平倫子他：心臓カテーテル検査を受ける幼児後期の子どもへの模型と人形を用いた効果的なプレパレーション。日本小児看護学会誌17(1)：23-30, 2008
- 7) 笹木忍：【translational researchとしての小児疼痛緩和の方法の開発】【痛みアセスメントツールと非薬理学的援助方法の導入による効果の検証と分析】子どもとその家族中心の疼痛緩和ケアを目指して。看護研究42(6)：419-424, 2009
- 8) Bandura A: Self-efficacy: Towards a unifying theory of behavior change. Psychological Review84: 191-215, 1977
- 9) Funk, S., Champagne, M., Wiese, R.: Barriers: The barriers to research utilization scale. Applied Nursing Research 4(1)：39-45, 1991